

荒木田麗女の紀行文

——『初午の日記』・『後午の日記』の道程——

はじめに

伊勢の女流文学者荒木田麗女（一七三二〜一八〇六）は、和文に優れ、歴史物語作者として有名であった。安永六（一七七七）年成立の『初午の日記』は、同年二月九日から四月一八日にかけて、麗女が夫の家雅・従者ととも現在の滋賀・京都・大阪・奈良・和歌山・兵庫を旅した際の紀行文である。この六十八日間の旅で麗女が歩いた行程を、(図1)に赤線で示した。この時麗女は四十六歳、家雅は五十四であった。

『後午の日記』は、『初午の日記』の旅の五年後、天明二（一七八二）年二月一五日から同年三月一〇日にか

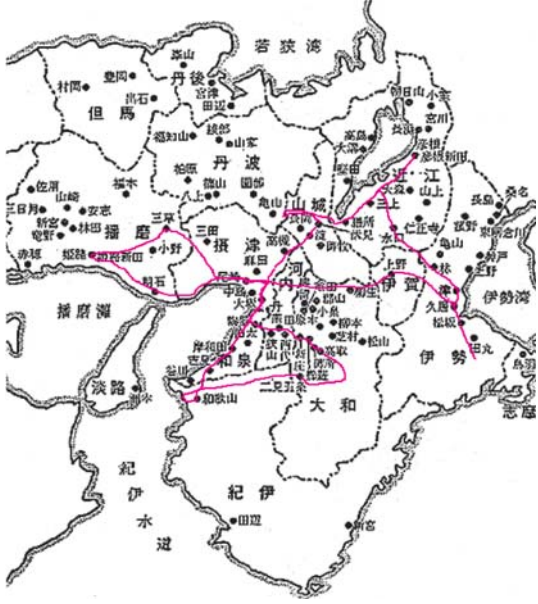


図1

雲岡梓

けて、京都・兵庫・奈良を旅した際の紀行文である。この二十六日間の旅で麗女が歩いた行程は、(図2)の赤線部分である。この時は従者も連れず、夫と二人だけの旅であった。この時麗女は五十一歳、家雅は五十九歳である。両書には立ち寄った土地での体験が和文体で綴られ、各地で詠まれた和歌・発句・漢詩が収められる。また、各地の文人との交流の様子が記されており、麗女の交友関係を知る上で貴重な資料であるが、これらに関する先行研究は存在しない。そこで本稿では、『初午の日記』・『後午の日記』の旅の道程や面会した文人、道中に詠まれた韻文を一覧表に整理することで、旅の全体像や麗女の交友関係を概観したい。

一、『初午の日記』

『初午の日記』の旅の動機は、冒頭部に「たゞ夫なる人の、浪華の方におもむき給へる、いそぎのやうに聞えなす物から、(略)いといたうやつして、二月九日いできた」と記される。麗女の夫の慶徳家雅は伊勢神宮外宮御師であるが、家雅がおそらく職務上の用件で難波に赴く必要性があり、それに合わせて名所旧跡の見物と寺社参詣、そし

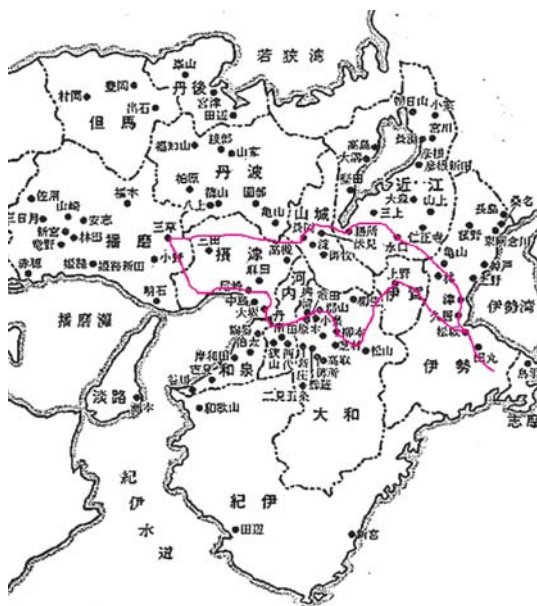


図2

て各地の文人との交流のための旅を決定したと推測できる。作中には面会した人物や通過点、天候等、旅の詳細について事細かに記述されている。また、和歌・漢詩・発句には、道中の景物に託して麗女の心情が詠み込まれる。冒頭で旅の装いについて、「今日よりはひたぶるの旅装して、菅の小笠うちかづき、ちひさき硯みじかき筆など、袋に入れて首にかけたり」と描写され、また文中の詩歌の後に「例の懐はなさぬ筆取出てかきつく」等とあることから、麗女が『初午の日記』執筆のために道中まめにメモを取っていたことが明らかである。『初午の日記』は、こうした備忘録に基づいた、実体験に忠実な紀行文であったと考えられる。

以下、『初午の日記』の旅における都合六十八日間の旅程の経由地・面会者・道中詠等を一覧表にまとめた。なお、『初午の日記』本文は古谷知新氏編『江戸時代女流文学全集』（文藝書院、一九一八年）に拠った。天気は麗女が日記中に記したものを記載し、記載がない場合は「不明」とした。『初午の日記』、『後午の日記』両書を通して、天候は日々の記録として几帳面に記すのではなく、情景描写の一環として「今日はことに日影もはれくしう」、「日ははれながら、山々はうち霞みたり」、「昼つかたより雨そ、ぎ出づるに、山々の子規は、げに声をしまぬばかりなり」のように文中に織り込まれている。そのため、天気に関する記述のない日も存在するのである。

経由地の名称は、麗女の記述を適宜現在通行の表記に改めた。また、寺社名等を「多賀の宮」↓「多賀大社」のように、一部一般的な名称に改めた。なお、近くを通過したのみで立ち寄らなかつた名所・旧跡は表に含めていない。

日付・天気	経由地	面会者	道中詠
二月九日 (不明)	自宅を出発。豊宮川・祓川・串田。松阪に宿泊。	奥田三角・赤須真人	川水の流れわかる、今朝しもぞきしの柳の目にか、りぬる
二月一〇日 (雨)	阿野津。くぼたに宿泊。		おほひ羽もたへずなり行く春雨になきたつ雁の声もしをれぬ

二月二日 (晴)	関川・筆捨山・鈴鹿山。土山に宿泊。		古來佳賞地 遍入万人看 今日松風裏 無常俗眼寒・いにしへの花の跡とてこれもまたふりすてがたき梅の下かけ・行きなやむ道のぬかりは旅人のえも過ぎやらぬ関にぞありける
二月二日 (雨)	かひかげの駅・石原・岡本・布引の山。八日市に宿泊。		琴の音にこれもやかよふ丸木橋下にながる、山かはの水・春雨をへだつる梅の花笠もにほひばかりはなほぞもりける・夕がほかとばかり白き軒のむめ・佐保姫のふでのたくみも浅からぬ霞のうつす山くしの色・とふ里の名をむつましみ草枕こよひはたびの宿とやはみる
二月三日 (晴)	愛知川の駅・高宮・多賀大社。彦根に宿泊。		白雪のかゝるにつけて伊吹山高きその名ぞあらはれにける・浅みどり霞める色を目にかけて雲井にあふぐ山ぞはるけき
二月四日 (不明)	彦根に滞在。	海老江某・龍世華	
二月五日 (雨)	彦根に滞在。 大洞・つくま江・龍潭寺・清涼寺	野村東皐・龍世華	山上宝宮石磴遐 夕陽斜挂扨烟霞 波平清眺砂汀暖 湖色映来風景加 ・春風のかゝる海辺をいかでかはみるめなきさと人のいふらん・大湖春色晚風収 群鳥扁舟共任流 極目長洲漂渺際 煙波千里意悠悠
二月六日 (曇)	彦根を出発。高宮・愛知川。武佐の駅に宿泊。	龍世華・野村東皐	おとにのみ聞きわたりつる春の色を今日こそさやにみづうみの波
二月七日 (雨)	守山・草津・瀬田の唐橋・打出の浜。大津に宿泊。	宇野醜泉	客路遙分曙色明 松風吹送遠鷄声 山村野水行廻首 残月纔加遊子情 ・眼路雲煙尽 眇茫曠野間 阿房疑再出 突兀万里山・こゝろありて曇りやすらん鏡山旅にやつれし影を見せじと
二月八日 (雨)	京に入る。白河・三条・誓願寺・京極・御所。江村北海宅に宿泊。(北海は留守)	清田龍川	年月をへだてし関もけふは又みやこにかよふ道となりぬる
二月九日 (不明)	京に滞在。	龍草廬	

二月二〇日 (曇)	京に滞在。		好風千里帝王州 梅柳參差紫陌頭 幽鳥一辞寒谷裏 初看韶景異山邱
二月二日 (雨)	京に滞在。小松谷・大谷・清水寺・音羽山・八坂神社・祇園・二軒茶屋	龍草廬	年を経てかはらぬ松のおとは山みし世をかたる友にぞありける・よりて見る人の老さへさやかにてかすみもかけぬ瀧のしらいと
二月二日 (雨)	京に滞在。		
二月三日 (雨)	京に滞在。		
二月二四日 (不明)	京に滞在。知恩院・長楽寺・丸山・大谷寺・双林寺・西行・平康頼の塚・祇園社		
二月二五日 (不明)	京に滞在。北野天満宮・平野神社・紙屋川		ちる木の香は飛あがる神がきにむかしをのこす春風ぞふく・松が枝にかゝる霞もひまそひて春の色さへかみさびにけり・かみや川たえぬ流は水荃の跡せきとめし名にこそありけれ
二月二六日 (不明)	京に滞在。嵯峨・妙心寺・仁和寺・鳴滝・広沢の池・大覚寺・名古曾の滝跡・大沢の池・清涼寺・小倉山・二尊院・祇王寺・野々宮神社・天龍寺・龜山・龜山院御陵・嵐山・大堰川・法輪寺・常盤	宏道禪師	春あさきかすみは消えて山かぜのこゑぞなる、鳴滝の水・はなちけん人は影見ぬ池水にたえずなれけるをしどりの声・瀑泉声息幾星霜名跡猶存田舎傍 唯有山鶯弄歌曲 風煙蕭索自愁傷・ふりにける名をのみとめし春の池は植ゑぬに生ふる岸の若草・仄逕相求西嶺春 樵夫指点旧蹤真 徘徊此日堪傷意 亭外老松摧作薪・松かぜや時雨をのこす春の山・説法台辺松樹蒼 天龍一化護靈場 欄前況有山河美 漸以苦吟難得章 帝王遺跡俯崔嵬 山象靈龜氣色開 宿昔繁華何足道 千年不改梵王台・おほる川名におふ花はまだしくていかだに春の風ぞながる、・とふ宿ははるもときはのふかみどり松と竹とを里のしるべに
二月二七日 (晴)	京に滞在。		

<p>二月二八日 (晴のち雨)</p>	<p>京に滞在。相国寺・詩仙堂 ・銀閣寺・吉田神社</p>	<p>蕉中禅師・維明 禅師</p>	<p>いかにせんしばし立寄る木の本は花さへ雨とともに降りぬる・心あらばいたくな降りそ旅人のそでほしわぶる頃のはるさめ・年を経てくもらぬ池の鏡にはむかしのかけぞさやかなりける</p>
<p>二月二九日 (不明)</p>	<p>京に滞在。</p>		
<p>三月一日 (晴)</p>	<p>京を出発。東福寺・通天橋 ・稻荷山・藤森・御香神社。伏見に宿泊。</p>	<p>清田龍川</p>	<p>糸たる、御寺の花はふるさとの春のほひもかけてしれとや・桃林霽色遍芳菲 灼々煙霞映晚暉 行愛東風流数里 清香散入路人衣・詣でよる神の御名さへかぐはしき花ぞ宮居のしるしなりける・はなゝの色をあらそふ伏見山にしきは春のみやこのみかは・駅亭遲日霽 激澗照前川 望渺山煙裏 步留花木辺 濁醪偏引興 苦茗轉消眠 唯為欠同賞 風光不作篇</p>
<p>三月二日 (晴)</p>	<p>淀の渡・石清水八幡宮・橋本・水無瀬殿・山崎の八幡宮・宝寺・渚院跡・交野・禁野。天河原に宿泊。</p>		<p>さす舟も八十島かくる心地してかすまぬなみに浮ぶ山くゝ・さす棹のしづくに波のはなちりて河瀬にはるの風ぞのどけき・千年皇廟肅崔嵬 遥裂連山石路開 回望東西心欲惑 白雲綠水照眸来・渡頭煙景渺 旅客望回風 坐覚浮滄海 遠帆入碧空・柳塢梅村路幾程 長堤行尽日 西傾 輕帆影遠煙波穩 帰雁声残入客情・そのかみにたえて桜の言の葉はかゝりし末の世をやしりけん・狩りくらす道ならなくにたどり来て天の河原にやどをとひぬる</p>
<p>三月三日 (不明)</p>	<p>佐太・天満天神・来迎寺。 難波に宿泊。</p>	<p>天満天神の聖</p>	<p>川波のいろもわかれてかすみさへひましらみゆく春のあけぼの・客路晴風望不迷 傍流数里上長堤 三竿旭日懸煙渚 白鷺分明綠水西・桃花照路報佳辰 放客初驚上巳新 遥想東山高興好 駅亭酷醉一杯春・はるかぜや花はむかしの神の梅</p>
<p>三月四日 (雨)</p>	<p>難波に滞在。</p>		
<p>三月五日 (晴)</p>	<p>難波に滞在。</p>	<p>頼春水</p>	

<p>三月六日 (不明)</p>	<p>難波に滞在。</p>	<p>言の葉の絶えせぬ道を尋ねずばいかでむかしの跡を見ましや・草逕未埋数尺墳 龍門原上隔埃氛 松風一灑千年淚 金玉声残多少文・野外古碑綠草中 英声已息起松風 耕人莫怪頻廻顧 墮淚一傷鴻業空・年をへてふた、びあふぐ神垣やかはらぬ松をくちぬちぎりに・立ちなれし春やむかしの面かけをかすみにのこす淡路しま山</p>
<p>三月七日 (不明)</p>	<p>難波を出発。生玉神社・藤原家隆の碑・天王寺・庚申堂・阿倍野・松虫塚・経塚・播磨塚・小町塚・北畠中納言の墓・住吉・住吉大社。堺に宿泊。</p>	<p>住吉もちかきなぎさとしら波のか、るうみべの春のながめに</p>
<p>三月八日 (晴)</p>	<p>堺を出発。石津に宿泊。</p>	<p>いつの世にたが一つ屋と名付けん軒をならぶる里と見つるを</p>
<p>三月九日 (曇のち雨)</p>	<p>石津を出発。堺・一つ屋村・阿保親王の墓。藤井寺に宿泊。</p>	<p>八百年のなほあまりある春風をいまもつたへし老松のこゑ・菜花春遍出林塘 黄緑遶村煙景長 蛟蝶翻々追客路 輕衣露湿着清香・春雨銜松樹 曠原靄晚風 頻傷前路眇 拳首望飛鴻</p>
<p>三月一〇日 (雨)</p>	<p>道明寺・八幡宮・大黒堂・壺井・通法寺・観音堂・源頼信、義家、頼義の塚・聖徳太子の古跡、岩屋・葛城の峰・二上山・当麻寺。新庄の駅に宿泊。</p>	<p>曙の色わかれ行く山かづらか、るをはるのすがたとぞ見る・覓芳春樹裏 一路入山隈 曙色随行朗 雲煙次第開・為傷春色老 日苦雨声斜 強入南山路 值人先問花・行きなやむ山路に咲けるすみれ草つかる、ひとに一夜宿かせ・来てみよとはなの名ちらす芳野山・籠には散るともよしや芳野山おくあるはなをたづねても見ん・ちる花のふすまを風のきするやと春の木蔭にたびねをぞする</p>
<p>三月一一日 (雨のち晴)</p>	<p>巨勢・とさ・高取城・壺坂・比蘇・世尊寺・吉野川・六田・吉野山・水分山・葉師堂・黒門鳥居・蔵王堂・吉水院。吉野山に宿泊。</p>	

<p>三月二日 (不明)</p>	<p>竹林院・世尊寺・勝手宮・子守の宮・奥の院・西行庵・後醍醐天皇陵・如意輪寺・吉野川。土田に宿泊。</p>		<p>その名さへ世々に絶えせぬ昔清水みどりをおのが春の色にて・塵の世をへだつる花の白雲におもひいりにし宿ぞしらるゝ・遠近の谷におりゐるしらくもは木の間の花のよそめなりけり・曾卜南山芳野名 莫言春老減清英 雨余猶有殘花美 処々好風遍晚晴・春老南山路 花狂乱夕陽 蝶飛添白片 鶯轉散清香 宜奪竹林興 何裁桂樹章 經過総勝跡 未減旧風光・吹きまよふ風にたまで散る雪に笠の端かをる花のしたみち・散る花をふみわけ帰るたび、とにかぜこそはるの錦させつれ</p>
<p>三月二三日 (不明)</p>	<p>あた・五条・寄足・待乳山・橋本・粉河寺。明寺村に宿泊。</p>		<p>行く人の立寄るあしをいつよりかかゝる御寺の名とはなしけん・はるぐさも人や待乳の山ならんをみなへしにも色のかよへる</p>
<p>三月二四日 (雨)</p>	<p>粉川寺・観音堂・楊柳井・根津寺。磐手の里に宿泊。</p>		<p>客路減春寒雨懸 雲間僅現遠山嶺 菜花繚乱飛原上 黄緑綴珠朝露円・たび衣ぬれそふはなのしづくさへ今日は一味の雨とこそしれ・松陰の草のまくらは斧のえの朽ちしところにやどやとひけん・一宿駅亭河水濤 老松遮雨翠森々 曾聞封爵千年事 今日頼憑偃蓋深</p>
<p>三月二五日 (雨)</p>	<p>日前の宮・紀三井寺・和歌の浦・妹背山・玉津島神社。和歌山に宿泊。</p>		<p>とふ里の垣ねに咲ける山吹はこたへぬいろぞこたへなりける・春雨のかゝる日いかに管蓑をころものせきとたのまざりせば・見るひとの心も爰による波のおとかすみ行くらのゆふなぎ・こゝるあれやしぱしながめも春の江の霞のひまをわたる浦舟・ゆぐみありて今日こそみつれ玉津島霞へだてぬ春のいりえを・わかぬや波も霞にたちかへてみるめたえゆく春のゆふぐれ・風帆開積霧 萍水任長流 身比天涯雁情親海上鷗 逍遙千里近 睥睨万峯悠 漫欲窺銀漢 無意訪女牛・こぎ出し舟路は波のはるゝと千さとをかくる心地こそすれ</p>
<p>三月二六日 (晴)</p>	<p>紀の川・山口。山中の里に宿泊。</p>	<p>伊藤蘭嶠</p>	<p>駅路雨乾午日新 客衣芬郁好風頻 紫藤花下旗亭裏 一盞春光醉幾人・たつか弓春の水瀬による波はなほしら鳥のいろをのこせる・山水のながれにむすぶくさまくら一夜ばかりも心すみけり</p>

三月一七日 (晴)	櫻井・蟻通明神・貝塚・岸和田・大津・下石津村。上石津村に宿泊。		鳥の音をはるけき道に聞捨て、月にともなふ野辺のたび人・三月花開 旗玉塵 悠揚蛟蝶媚芳辰 春山最好誇行楽 処々東風遍醉人
三月一八日 (晴)	堺・住吉・大江岸・茶臼山 ・一心寺・安井天満宮。難波に宿泊。		しら浪のよせし岸根もいつのまにうねく青き麦の生ふらん・さきつ ぐを神もやめでし梅ざくら
三月一九日 (不明)	難波に滞在。		
三月二〇日 (不明)	難波に滞在。五百羅漢の御堂・野田	葛子琴	かげなびくこやねの藤の春の色をうつして仰ぐ神垣のはな
三月二二日 (晴)	難波を出発。曾根崎天神・梅田・尼崎・難波村。今喜多村に宿泊。		陰しめてつくれる宿は玉松の春のひかりもよるづ代までに
三月二二日 (晴)	今喜多村に滞在。		郊村晴望趣尤真 門対田園長富春 終日閑吟招隱賦 淹留偏喜伴松筠
三月二三日 (晴)	西宮・西宮神社・芦屋・むはら住吉・御影浜・印南野・三犬女の浦・敏馬神社・生田川・湊川・楠正成の墓・碑・兵庫・経ヶ島・築島寺・和田岬。兵庫に宿泊。		海近き西の宮居に咲く花はなみのしらゆふかくるとぞ見る・浦波のよ こそあらめ芦屋がたしほのひるまも風の涼しき・こ、もまたながめ は春の海辺とてあととゞめけん住吉の神・浦波の立寄る人したえぬ世 にいかでみぬめの名を伝ふらん・咲く花も道さまたげの名をしめてと へど生田の杜に匂へる・千古高墳田野東 名声不讓蜀都雄 両朝独寡 保城策 一代全懷報告忠 鶴去松陰春色寂 龍藏潭水晚煙蒙 訪人総 拭滿襟淚 強見孤碑綠草中

<p>三月二四日 (晴)</p>	<p>平清盛墓・福原庄・須磨寺 ・関屋・在原行平古跡・一の谷・平敦盛墓・菅原道真古跡・舞子浜・仲哀天皇陵・明石人麻呂神社・大蔵谷天満宮・平忠度墓。長池に宿泊。</p>		<p>す、舟や今もよりけん鳴く雉子・花ちりて春は老ぬる木の本に若葉ぞいまま名をとゞめける・あれはてし関屋に残る松風に通ふは波の音にぞありける・綱手繩引とめがたきそのかみのわかれの跡ぞ絶えず残れる・朝霧のおもかけのこす夕がすみかゝるを今も神やめづらん</p>
<p>三月二五日 (不明)</p>	<p>野口・刀多・鶴林寺・尾上の鐘・相生の松・高砂・飾磨の里・加古の駅・曾根の松。姫路に宿泊。</p>		<p>一株靈樹旗青煙 培植懃期万年 花木只今春色老 依然秀質廟堂前</p>
<p>三月二六日 (晴)</p>	<p>広峰・いや高山・増井・春日野村。法華寺恵教坊に宿泊。</p>		<p>山中人語絶 雲外聴笙声 知是遊仙地 松風送鳳鳴・はるゝと分けのほりにししるしありて仰ぐ光もいやたかの山・谷水に浮世のあかをすゝぎつゝ、しばし濁れるかげもはづかし・勝地遙尋千仞岡 松根石骨路羊腸 鳥声度谷晴嵐静 風景裂眸及遠疆・わか草のやがても萌ゆる春の日はさしてしらるゝ春日野の里・千年精舎澗流潯 路入林鬱新樹深 閑寂偏耳無俗趣 唯聞石水雅琴音・青柳のいるこそあらめさくらさへ朽木も花のはるにあひぬる・投宿山中仏樓 白雲緑水邊簷流 上方半夜経声響 転洗塵心来枕頭</p>
<p>三月二七日 (曇)</p>	<p>社の里・三草。林某宅宿泊。</p>	<p>林某・野上某</p>	
<p>三月二八日 (雨)</p>	<p>三草に滞在。</p>	<p>野上某</p>	

三月二十九日 (晴)	三草に滞在。山国村・妙仙寺・三草侯墓・瀧野。野上某宅に宿泊。	林某・野上某	からにしき紐とく松の下つ、じ夕日も春のいろにうつりぬ・七年の春のかすみをわけて来て月のいりにし跡をとひつる・よしや世の春こそつきめ山寺の御法の花はうつりやはする・数里飛簾玉来 霞釣捲尽石崖鬼 春深却覺寒風急 檻外雪涛起晚雷・春のみや越ゆると思はん旅人もおなじ名残のあかつきの鐘
四月一日 (不明)	三草を出発。天神・毘沙門の里・竹原の駅。道場川原の里に宿泊。	野上某	白妙は雪にやかへす衣がへ・咲く花は昨日のま、の春の色を夏にか、ると思ひやはする・朝市鶯花今日稀 山中四月最芳菲 遊行恰似尋仙境 初覺麥哀世事非
四月二日 (不明)	有馬山・三輪の神を祭る神社・薬師如来の御堂・松坂・中山寺・観音堂・満願寺・藤原仲光の墓。多田に宿泊。		主人強莫歎 山店食無魚 此対群芳美 一杯歛有余
四月三日 (晴)	池田・本庄・浜の寺。難波に宿泊。		風さむみ衣かへうき空なれや山はかすみのなほか、りぬる
四月四日 (不明)	難波に滞在。		
四月五日 (不明)	難波に滞在。天神橋	林某・細合半齋	浪速客居江水東 長橋高掛現浮虹 怪看来往通朝市 此地却疑近月宮
四月六日 (不明)	難波に滞在。		
四月七日 (曇のち雨)	難波に滞在。	岡魯庵・木村兼 葭堂	関外南薰千里新 怪萍適倚浪華津 淹留莫怪誇臨水 連夜小樓明月羨
四月八日 (不明)	難波に滞在。	森蘭齋	小楼暮色对晴川 埽掉歌高人遠天 開扇斜陽搖細浪 佳人双照綺羅鮮 ・さす舟の心にのりし川づらは世をうみわたる道としもなし

<p>四月九日 (不明)</p>	<p>難波を出発。玉造・河内路 ・深江の里・木村重成の墓 ・山口侯の墓・花園の里。 松原の駅に宿泊。</p>		<p>宿昔延津気 躍龍没水煙 英風殘古木 声与旧愁纏</p>
<p>四月一〇日 (曇)</p>	<p>大和路・小倉山・くらがり 峠・富の小川。うす村に宿 泊。</p>		<p>かりそめにきつと思ふを月日さへはるかになりぬ旅の衣手・名もしる き山子規あま雲のよそにはつげぬはつ音をぞきく・かたらはゞ山路く らさんほと、ぎす・今の世のにごりにしまぬ川水をたえせぬのりの流 とぞしる・いまさらに何すくはましうろくづの浮ぶは法の流ならずや から衣はるかなる世の面影をうつして水に咲かきつばた・山風蕭索 梵王城 千歳纒存不退名 変化可知楊柳色 只看松樹翠光明・春日野 の露のめぐみに旅ごろも程なき袖のかくもうるほふ</p>
<p>四月二一日 (晴時々雨)</p>	<p>砂茶屋・西大寺・さらし村 ・法華寺・神功皇后御陵・ 不退寺・在原業平古跡・奈 良・聖武天皇御陵・東大寺 ・八幡宮・二月堂・若草山 麓・春日野・水尾・春日大 社・興福寺・南円堂。岡村 邦高宅に宿泊。</p>	<p>岡村邦高・永谷 宗定</p>	<p>連歌会張行。</p>
<p>四月二二日 (不明)</p>	<p>奈良に滞在。</p>	<p>篁鶴陵・永谷宗 定・大東延樹・ 富田光知</p>	<p>連歌会張行。</p>
<p>四月一三日 (晴)</p>	<p>奈良に滞在。猿沢の池・興 福寺南大門・元興寺。</p>	<p>永谷宗定・大東 延樹・富田光知</p>	<p>連歌会張行。</p>
<p>四月一四日 (雨のち晴)</p>	<p>雲井坂・轟の橋・東大寺・ 般若寺・加茂の里・木津川 ・笠置。天河原に宿泊。</p>	<p>岡村邦高・篁鶴 陵・永谷宗定</p>	<p>帰るさのかざしにさ、ば八重桜にしきにまさる色や見えまし・春霞わ けていでしを立ちかへるそらには夏の雲ぞたなびく・旅人のわぶとも しらでほと、ぎすおちくる声の雨を誘へる・旅人にこゝろやつくすほ と、ぎす・蜀魄山雲裏 声随暮雨飛 頻驚孤枕夢 遠客一沾衣</p>

四月一五日 (雨のち晴)	鳥ヶ原・上野・山田。平松の里に宿泊。		山々夏木翠雲連 陰雨霏々逐杜鵑 客舍今朝帰思切 数声啼破族人眠 ・ふる雨を五月の空にまがへてや山ほと、ぎす声もをしまぬ
四月一六日 (晴のち雨)	長野三軒茶屋・日置の里・久居・月本・六軒。松阪に宿泊。		さやかなる声に鳴くなりさしのぼる日かげにきほふ山郭公・こゑの色を染むるながれや子規・日数へてかへるさととふる里の名は旅にひさゝと人ぞ答ふる・野外残芳尽 松間躑躅紅 晚霞村外火 照路耀晴風
四月一七日 (雨)	榑田	奥田三角	
四月一八日 (雨のち晴)	宮川。帰宅。		故郷のはなはあとさへ夏の色もまづめにかゝるみねの白雲・たび衣たちかへりぬる夏の色を河瀬の波にかけてこそしれ・かげ高き峯の一木は旅人を待つしるしとも今日こそは見れ

麗女は道中に和歌百二首、漢詩四十七篇、発句十句を詠んでいる。そして旅の途中面会した人物で名前が記されるのは、以下の二十六人である。なお、人名は麗女の表記に従い、一般的な呼び名を括弧内に記した。生没年は『人物故大年表 日本人編Ⅰ』（日外アソシエーツ、二〇〇五年一二月）に拠る。

- 奥田三角 儒学者・漢詩人。一七〇三〜一七八三。津藩儒官。
- 赤須真人 真台寺住職・漢詩人。一七二六〜一七八八。松阪の真台寺四代目住職。
- 海老江某 詳細不明。彦根の文人。
- 龍草廬 儒学者・漢詩人。一七一五〜一七九二。幽蘭社を開く。彦根藩儒官。
- 龍世華 儒学者。一七五一〜一八二二。草廬の子。彦根藩儒官。
- 野村東臯 儒学者・漢詩人。一七一七〜一七八四。近江の人。
- 宇野禮泉 儒学者。一七二二〜一七七九。近江の人。

清田龍川

儒学者・漢詩人。一七四七〜一八〇八。江村北海の第三子。

宏道禪師

詳細不明。天龍寺僧侶。

蕉中禪師（大典顕常）

漢詩人。一七一九〜一八〇一。相国寺一一三世。伊藤若冲の支援者。

維明禪師（維明周奎）

画家。一七三一〜一八〇八。相国寺一一五世。伊藤若冲に画を学ぶ。

天満天神の聖

詳細不明。大坂天満宮の僧。

頼千秋（頼春水）

儒学者・漢詩人。一七四六〜一八一六。片山北海門。

伊藤蘭嶠

儒学者。一六九四〜一七七八。伊藤仁斎の五男。

葛子琴

漢詩人・医家。一七三九〜一七八四。大坂の人。

林某

詳細不明。三草の人。

野上某

詳細不明。三草の人。

合離先生（細合半斎）

儒学者・書家・漢詩人。一七二七〜一八〇三。菅甘谷門。

元鳳先生（岡魯庵）

儒学者・漢詩人。一七三七〜一七八七。大坂の人。

木村兼葭堂

本草家・文人。一七三六〜一八〇二。

森蘭斎

画家・医家。一七三一〜一八〇一。加賀藩御用絵師。

岡村邦高

連歌作者。奈良の人。

永谷宗定

奈良の人。儒医で連歌作者の林田宗定と同一人物か。

篁鶴陵

漢詩人・連歌作者。奈良の人。

大東延樹

連歌作者。春日大社神官。

富田光知

連歌作者。春日大社神官。

麗女はこれらの人々を積極的に訪問し、「唐倭の興ある物がたり」に時を移し、歌文を遣り取り取りしている。この旅の動機的一端が、各地の文人との交流にあったことは明らかであろう。

二、『後午の日記』

この旅の目的は、冒頭部に「すゞろにいにしへの忍ばしさに、心もうき立ちて、(略)俄に旅立つべうにてなん」と記される。今回は何らかの用事によって旅に出る必要性があったのではなく、単に名所旧跡を巡るための旅であったようである。旅の装いについて、「従者をも具せず、人と我と只二人にて、身に添ふる物もなく、人はわづかに小さき硯・紙・筆ども袋に入れてもたる。みづからも袋を前にかけて、つげの小ぐし・鏡・たゝうがみ、糸・針・たき物など入れたり」と描写される。筆記用具を持ち歩いていることから、この時もやはり紀行文執筆のために道中メモを取っていたと思われる。『後午の日記』の旅における計二十六日間の旅程の經由地・面会者・収録歌は以下である。なお、『後午の日記』本文も、前掲の古谷知新氏編『江戸時代女流文学全集』に拠る。

日付・天気	經由地	面会者	道中詠
二月一日 (晴)	自宅を出発。豊宮川・からす崎。安濃津に宿泊。		松原にかけ有明は春もなし・板橋や春さへとむる霜の跡・風ぞもる霞は網を春の山・浜松やみどりを春の風の色・波の花は春とて白しからす崎
二月六日 (不明)	筆捨山。鈴鹿山麓。坂に宿泊。		岩ほさへきさらぎ寒し峯の雲・佐保姫に衣からばや旅の道・ひゞき来てかりねの夢やあらふらんたきつながらの山河の水・たび、とまさこそやどらめ月影をかけてまつてふ宿の梅がえ
二月十七日 (晴のち雨)	鈴鹿山。石部の里に宿泊。		梅が香に又あくがる、旅ごろもむかしにかへす袖のはるかぜ・榭葉の日やふるさとの春の色

<p>二月一八日 (晴)</p>	<p>横田川・勢多の橋・比良の山・膳所・桃源院・查看亭・打出の浜・辛崎の松・日吉神社。坂下に宿泊。</p>		<p>花ならぬ比良の吹雪に春もなし・にほの海や杳に見よと薄霞・行舟やかけ遠方に帰る雁・春の色を若葉や波に流蘆・春ふかし霞も色のひとつ松</p>
<p>二月一九日 (晴時々雪)</p>	<p>山中越・志賀の里・白河村・三条・鴨川。京の龍草廬宅に宿泊。</p>	<p>龍草廬</p>	<p>今もまた花のしるべのはるかぜに梅が香とむる志賀のやまこえ・淡雪にかつちる花のおもかげをかねてぞみする志賀のやまこえ・二月の花の吹雪かひえ嵐・たにがはにながる、水のおと冴えて春さへきゆる滝のしらあわ・花さかばやすらふ山としづのをがかねてさくらの陰ならすらし・春風のしがらみもなし雪の波・常盤木に陰をならべて花はまだ木の芽ぞはるのいろをわきける・こゝろすむ月をしるべに加茂河や遠きながれをたづねてぞとふ</p>
<p>二月二〇日 (雨)</p>	<p>東寺・四塚・山崎・向日明神。芥河に宿泊。</p>	<p>龍草廬</p>	<p>神垣やむかふ日それと春霞</p>
<p>二月二二日 (雨)</p>	<p>古曾部の里・郡山の駅・瀬川の駅・棚橋・細小川。小浜に宿泊。</p>		<p>あくたがはわたりをいそぐ旅人もゆくさきとほき道ぞしらるゝ・かすみつゝふり来る雨に尋ぬべき宿のこずゑも見えずなりぬる・分佐びぬ草の露けき春の雨・雨かけて消えせぬ雪や庭の梅</p>
<p>二月二三日 (晴)</p>	<p>竹原に宿泊。</p>		<p>山祇やめで、た、へし春の水・河水やかすまで残す雨の声・やまひめのむすぶしづくか底清き谷のながれのしばしにこれる</p>
<p>二月二三日 (晴)</p>	<p>三草の山中に宿泊。</p>		<p>道遠し越ゆる山はた八重霞・とはゞやとおもひた、ずば春霞かさなるやまをいかで越えまし</p>
<p>二月二四日 (不明)</p>	<p>家雅の急病により、同じ山中の宿に逗留。</p>		
<p>二月二五日 (雨)</p>	<p>同じ山中の宿に逗留。</p>		<p>咲継げと雨ややしなふ梅桜</p>
<p>二月二六日 (不明)</p>	<p>この日の記事なし。同じ宿に逗留か。</p>		

二月二七日 (不明)	家雅回復。同じ宿に逗留。一の瀬川・千鳥橋・三草川。		ながれ行く石まになみのはなちりて春を三草のかはかせぞ吹く・今日ぞみつかゝる岩ねの松の春・はるかぜのおとを杵歌や水車・かはみづのあはれもふかし旅まくらむすぶ三草の春のあけほの・音たえぬ河瀬のなみをうきまくら浮寝はゆめもゆるさざりけり
二月二八日 (不明)	三草を出発。奥谷村・法光寺。沖村に宿泊。		
二月二九日 (晴のち雨)	丹生の山田。兵庫に宿泊。		世の春にうつらぬ色よ峯の松・まつふかみつむ年もいく春霞・さといづこ山に立ちそふ雲霞・松ふかし春のみどりも百重山・草まくらむすびもとめぬ旅人のうきかずくはいかゝかたらん
二月三〇日 (雨)	同じ宿に逗留。宿の主人、近隣の文人と酒宴。		
三月一日 (雨)	同じ宿に逗留。近隣の氏神・和田岬。		
三月二日 (晴)	湊川・生田神社・砂山・布引の滝・垂髪少女の塚・ちぬ男の塚・さ、だ男の塚・むはら住吉・御影の浜・芦屋の里・黄金塚・打出の浜。西宮に宿泊。		別路やげにこゝろよるいとざくら・いろかへぬ言葉の花をちぎりにて又めぐりあふ春ぞあるべき・千代をつめ六十あまりの花のゆき・津の国のなにはかくれぬ言の葉の花にも法のひかりをぞしる・手をわかつ折しる色よかはやなぎ・山姫のおりはへさらす名もしるしら糸かくるぬのびきの滝・滝の糸のよりにてこそみれ名に高きいさごの山のおくを尋ねて・天の河ゆきげしられつ滝つ波・かすみさへ八重の汐路をこぎわけて遥にうかぶ沖のともぶね・釣舟や乱れし波のうはがすみ・神垣や里の名におふ春のうみ・たび人の身を浮海松にさそはれて蘆屋の里にながれよりける
三月三日 (不明)	今喜多村・尼崎。難波に宿泊。		姫桃やふきて今日のみ宿のつま・とふ宿は花のしるべに三千とせの春をくみしる桃のさかづき

<p>三月四日 (不明)</p>	<p>大坂天満宮・玉造・八尾・地藏堂・栢振村・西郡村・若江・木村重成の碑・山口侯墓・花園の里・吉田の里。松原村に宿泊。</p>		<p>名ぞ残る主はむかしの春の雪・春のいろに心入にしようたぶくろかはづやはなの折をしるらん・流れ藻や若葉も水の浅みどり</p>
<p>三月五日 (晴のち雨)</p>	<p>小倉の峯・龍田・立田川・法隆寺・聖徳太子の駒塚・小泉・豊楽。郡山に宿泊。</p>		<p>木の間もる春風さむきおく山のさくらは雪をなほのこしけり・枝かはすさくらに松のひまみえて緑にまじるはなのしらくも・松やけふみどりかくろふ花盛・わけいるや人も尾越の桜がり・山吹の花の八重垣ふるさとをへだて、咲けるいろにぞ有ける・旅人のひまなくわたる川橋はかゝるかすみもなかや絶えなん・打霞むこのめも春のこずゑよりいろそふ秋やかけて待つらん・雨ふくむ竹や豊楽の春のこゑ</p>
<p>三月六日 (雨のち晴)</p>	<p>薬師寺・仏足石・招提寺・戒壇の御堂・尼ヶ辻の里・興福寺・東大寺・大仏堂・若草山・春日大社・猿沢の池・元興寺・おびとき・地藏菩薩・在原寺・石上神社・布留の鳥居・丹波市。柳本の里に宿泊。</p>		<p>引虹のあらたに晴ぬ今朝の雨・御仏のふみおく跡を見るからにむすぶえにしのちぞ頼もし・消えぬ跡を今水ぐきや代々の春・こゝろあれや古ぬる寺もとふ人のふむ跡のこす庭のはるさめ・いにしへを残すさかりや八重桜・かつちれば咲く桜ある木蔭かな・木の本の雪とはみれどふむひとの跡なきにこそはなど知らるれ・若草の名におふ山やあさみどり・うちなびくかすみのひまも若草のみどりにつゞく春日野のはら・水にかけ残す玉藻がたまやなぎ・古塚やはるかにあふぐ春日かけ・小薄やいづら一むらゆふがすみ・ゆふがすみいかにへだて、石上布留のやしろをよそになしける・まくらゆふ草さへおなじ緑なるやなぎがもとにかりねをぞする</p>
<p>三月七日 (晴)</p>	<p>穴師・巻向山・檜原山・三輪の里・三輪神社・しるしの杉・茶臼山・初瀬の里・初瀬寺・化粧坂・灰原の里・大野村・弥勒岩・三本松に宿泊。</p>		<p>風わたる穴師の檜原くもりなくこずゑわかる、はるのあけぼの・たちつゞく里のけぶりにあけわたるしるしをそれとみわの山本・さしのぼる山のどかなる朝日かげあふぐも高き三輪のかみすぎ・道分けてあへる子やたれ春がすみ・今日ぞ見つさかり名におふ花の国・松の色やはなも一しほ初瀬山・はるふかきしるしを三輪の山かづら霞をかけしみねのあけぼの・小山田や花せきいるはるのみづ・なほわけん山のかひある花のおく・道もなし露のみむすぶ春の草・したぶしや柳につゞく松のかけ</p>

<p>三月八日 (晴のち雨)</p>	<p>長瀬・七見峠。伊賀の国伊勢路に宿泊。</p>		<p>散る花に見よ仙人のやどのゆき・世を避けて誰すむ里ぞ桃のかげ・桃さくらつゝながめのはるの山みやこの外もにしきをぞはる・賤が屋も花みてくらすはるなれや梅よりつゞくのきのつまなし・来る人やかすまで絶えぬ曲折・分け行くやかかすみもいく重幾枝折・明けはとくいらたつ道をしらせつゝ、今宵も里の名さへむつまし</p>
<p>三月九日 (晴のち雨)</p>	<p>青山・小倭。波多に宿泊。</p>		<p>松はあれどまづしる人や山桜・国かはり流かはるや春のみづ・いる山も奥ある花の枝折かな・かつもゆる草を焼野のしるし哉・岩根ふ山やかさなる雲かすみ・心のみ世にかよひけり岩がねのこりしくやまはふみならせども・春来ても花なきやまはうぐひすも住みうかれてや里にいでけん・旅人のふみならしけるおくやまを道しある世のほかとやは見る・雲幾重望むさへめも春のやま・あかでのみ詠は幾日花ざかり・入る山や日々にあらたに花桜・よせかへる波のしらすはかすみさへながれてはやき川風ぞ吹く・なびきあふ木の間に見えて旅びとの笠のはつかに道つゞくらし</p>
<p>三月一〇日 (雨のち晴)</p>	<p>松阪・毘沙門寺・櫛田・豊宮川。夜に帰宅。</p>		<p>さとに今日いでつとみれど足引のあらしはたえず松に吹きけり・きのふまで分し山辺をしら雲のあなたにけふはおもひこそやれ・帰るさや空にともなふ雁の声・里はけふ春やあらぬの青葉かな・雪とちる花やいづこの山おろし・吹く風も色のさかりややなぎはら</p>

旅の途中面会した人物で名前が記されるのは、『初午の日記』の際とは打つて変わつて、龍草廬一名である。旅程自体が『初午の日記』の旅の六十八日間に対して二十六日間と短いこともあるが、これには五十歳を越えた麗女の体力及び気力の衰えも関係するだろう。この『後午の日記』の旅は、『初午の日記』の旅とは異なり、文人との交流を目的とはしていなかったようである。

また、道中で詠まれた和歌は五十首、発句は七十一句。漢詩は詠まれていない。『初午の日記』の際には和歌が最多で、次いで漢詩が多く、発句は少なかつたが、『後午の日記』の際には発句が最も多くなり、漢詩は収載されていない

ない。五年間の間に麗女の興味が漢詩から発句に移ったのではないかと考えられる。

ま と め

『初午の日記』と『後午の日記』は、麗女の交友関係を知る好資料でありながら、詳細な分析がなされていないかった。そこで今回、旅の経由地や面会者・道中詠を表形式でまとめた結果、麗女が大坂・京を中心として多数の文人と交流し、広い人脈を有していたことが確認できた。そして、道中で詠まれた和歌・発句・漢詩の数を数え挙げることによって、安永六年から天明二年の五年間に、麗女の漢詩への熱意が薄れ、連歌発句への関心が増していったことが見て取れた。

以上、麗女の紀行文二作の道程や面会者について概観してきたが、『初午の日記』・『後午の日記』の記述内容の分析に関しては別稿に譲りたい。